仙台北三番丁教会
2023年8月13日 三位一体後第10主日

我等の一生は戦闘なり

代務牧師　齋藤　篤

聖書　テモテへの手紙一6章11～16節
[11]しかし、神の人よ、あなたはこれらのことを避けなさい。正義、信心、信仰、愛、忍耐、柔和を追い求めなさい。
[12]信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい。命を得るために、あなたは神から召され、多
くの証人の前で立派に信仰を表明したのです。[13]万物に命をお与えになる神の御前で、そして、ポンティオ・
ピラトの面前で立派な宣言によって証しをなさったキリスト・イエスの御前で、あなたに命じます。[14]わたした
ちの主イエス・キリストが再び来られるときまで、おちどなく、非難されないように、この掟を守りなさい。[15]神
は、定められた時にキリストを現してくださいます。神は、祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、[16]唯
一の不死の存在、近寄り難い光の中に住まわれる方、だれ一人見たことがなく、見ることのできない方です。
この神に誉れと永遠の支配がありますように、アーメン。

日本聖書協会『聖書 新共同訳』

我等の一生は戦闘なり。

私はある日、この言葉が古本屋さんで買った一冊の本に書き記されているのを見つけました。この本の名前は、ジャン・カルヴァンという、約500年前に生きたフランスの宗教改革者が書いた『キリスト教綱要』です。本の持ち主は、29歳になるひとりの青年牧師でした。その名前は、鈴木正久さんと言います。彼がこの本を購入したのは、1941年4月と、本の裏表紙に記されていました。

1941年4月と言えば、ヨーロッパでは第二次世界大戦がすでに繰り広げられており、日本でも中国との戦争が長きにわたって行われていた最中でした。そして、その数か月後には、日本軍はハワイにある真珠湾を攻撃することをきっかけに、いわゆる「太平洋戦争」が開始されることになります。

そのような戦争中という状況のなかで、「我等の一生は戦闘なり」、つまり、私たちの一生は戦いなのだと。鈴木さんは、どのような気持ちで、どのような意味でこの文章を本に書き記したのだろうか。そんなことを思わされました。今日はそのようなことを想像しながら、聖書の言葉に耳と心を傾けてみたいと思います。

そのことを考える前に、まず宗教改革者のひとりである、ジャン・カルヴァンというがどういう人物であったかについて、簡単に説明したいと思います。カルヴァンは、16世紀のフランス、そしてスイスで生涯を送った、神学者と呼ばれる、神についての研究を深めた人物でした。そして、当時のローマ・カトリック教会のあり方を批判することで、時の権力者たちからにらまれることになりました。カルヴァンは、聖書に書かれている神の思いというものを、ローマ・カトリック教会は理解せず、間違った教えを人々に伝えている。そう考えていたのです。そして、いわゆる「プロテスタント」と呼ばれる、以後500年にわたる歴史を持つ教会の基礎をつくりあげるひとりとなりました。

カルヴァンは、ローマ・カトリック教会を批判することで、命狙われる存在となりました。彼が25歳の時、フランス国内で起きた批判者に対する大々的な弾圧事件によって、彼はフランスからスイスに亡命したのでした。彼にとっては、生きるか死ぬかの瀬戸際のところで、命からがらスイスの地へ逃げることができたのです。

しかし、カルヴァンは、自分の命がねらわれたからと言って、ローマ・カトリック教会に対して批判することをやめませんでした。なにもカルヴァンは、ローマ・カトリック教会のことが憎くて、批判したのではありませんでした。ただ、イエス・キリストが私たちのことを愛している。そのことを伝えたい一心で、当時の教会のあり方について、批判を続けたのでした。

そして彼は、以後約20年間にわたって、どのように聖書からキリストが伝えた「愛」というものを伝えることができるかについて、本を書き記し続けました。それが『キリスト教綱要』という、今でも多くの人々に読まれている本にまとめられています。彼にとっては、人生をかけて、自分が殺されるかもしれない状況のなかで、「神を信じる」ということの闘いを続けました。

その闘いの思いが書き記された文章を読んだ、約400年後の日本で生きた、鈴木さんというひとりの牧師が、私たちの一生は戦いである、と書き記しました。実は、1941年という時代、当時の日本で、キリストを信じて生きるというのは、まさに命がけに近い行いだったのです。

戦争が行われるなかで、さらに大きな戦争が行われようとしているなかで、当時の日本にとって「神」とは天皇のことであり、「現人神（あらひとがみ）」という、人間のかたちをとった神なのだから、天皇を崇拝することを差し置いて、キリストをあがめることは、「治安維持法」という法律によって逮捕され、処罰される行いでした。日曜日の礼拝でも、最初に東京にある皇居のほうを向いて、深々と礼をしなければ、礼拝を続けることができませんでした。国の役人が教会の礼拝を毎回監視して、そのことを行わなければ、礼拝の解散が命令されるような状況だったのです。

だからこそ、鈴木さんは、おそらく自分自身の姿を、宗教的な弾圧のなかで、神の愛を心から信じる者として、反対者と闘い続けた、宗教改革者カルヴァンに重ね合わせたのでしょう。まさに、彼にとっての一生は戦いである。彼の書き込みには、そのような思いが込められているような気がしてならないのです。

さて、今日の礼拝で読まれた聖書の言葉は、キリストの愛を伝えることに一生をささげたパウロという人物が、年若い青年テモテへ大切なことを伝えようとした手紙の一部です。パウロはテモテにこう書き送りました。

> 正義、信心、信仰、愛、忍耐、柔和を追い求めなさい。信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい。命を得るために、あなたは神から召され、多くの証人の前で立派に信仰を表明したのです。（6章11節後半～12節）

キリストが私たち人間に示された愛を追い求めなさい。それだけではなく、そのことを信じる気持ち、本当に正しいとされること、どんな反対にも屈することなく生きること、そしてどんな状況であっても、おだやかであり続けること。こういうことを自分自身の人生の闘いとして、戦い続けなさい。それが神を知るあなたにとっての務めなのですよと、パウロは青年テモテに、このように伝えたのでした。

おそらく、29歳の年若い牧師であった鈴木さんもまた、400年前に生きた20代後半のカルヴァンもそうであったように、約2000年前にパウロが励ました青年テモテもそうであったように、こういう聖書の言葉に励まされながら、神の愛というものに自分自身の生き方を定めようとしたのだろうと思うのです。そして、そのための闘いを、しっかりと戦い抜く。それは、これから行われようとしている戦争に対して、人が人を殺すことの無意味さというものも含めて、反対の心を持ち、声を出し続けようとする思いがあったのでしょう。

実は、鈴木さんは「私たちの一生は戦いである」という言葉の前に、こんな内容の言葉を書き記しています。「真実を休むことなく語り続けても、必ずしもハッピーエンドになることを期待してはならない。真実を語り続けても、必ずしもその通りにならないことにがっかりしてはならない。私たちの一生は戦いなのだから。」

この言葉から、鈴木さんの戦い続けようという意気込みのようなものが感じられるのです。しかし、鈴木さん

の意気込みは、当時の戦争を推し進めようという「圧力」を前に、その戦いに負けてしまいました。太平洋戦争が始まった翌年、1942年に鈴木さんは子ども向けに書いた聖書の説明書において、戦争に協力していると言われても仕方のない内容の文章を書き記してしまったのでした。

私は、そのときの鈴木さんの心というものを推し量ることはできません。しかし、私がそういう立場だったら、どんな思いにさせられるだろう。そんなことを考えるのです。キリストの愛に反するものには、批判の心をやめることなく戦い続けよう。そう思っても、目の前にはだかるさまざまな反対の目、声、空気。そういうものに苦しみながらも圧倒されてしまうほど、つらいところを通らされる経験だったと思えてならないのです。

1945年、日本は戦争に敗けました。ここから、日本は「平和」を掲げた歴史が始まりました。平和主義を看板に掲げた「日本国憲法」が生まれ、人間が人間らしく生きるための自由が保障されるようになりました。他者の自由をさまたげてならないことも、神を信じる自由もまた、私たちに与えられました。

そのことと同時に、聖書に記された神の愛というものを、何にも妨げられることなく、教会で伝えることができたのでした。鈴木さんもまた、牧師をつとめていた東京の教会で、年若い人たちに、キリストの愛というものを存分に伝え続けていきました。東京大学のすぐちかくにあったその教会には、いつも大学生など若い人たちが集まり続けました。

しかし、鈴木さんにはどうしても解決しなければならない問題がありました。かつて自分が、戦争中にあの圧力に屈し、戦いに負けてしまったそのことを、その責任というものを告白しなければならない。おそらく、そのことは彼の人生にとって、ズシリとくる重荷になり続けたことでしょう。

時は過ぎて1967年3月26日、この日はイースターの日曜日でした。鈴木さんは、ひとつの文章を公に発表しました。彼は、日本基督教団の総会議長という立場で、「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」という文章を世に送り出したのです。この文章のなかで、鈴木さんは戦争協力をしたことによって、キリストの愛を守り抜くという信仰の戦いに負けてしまったことへの告白を書き綴っています。そして、二度とこのようなことを繰り返してはならないことを神に誓い、この告白の文章を閉じています。

鈴木さんは確かに、戦いに負けました。しかし、その後も「平和への戦い」というものを、その生涯を通して繰り広げ続けました。鈴木さんは、戦争責任の告白を発表した2年後に病に倒れ、56歳という若さで、その一生を終えました。まさに「私たちの一生は戦いである」という本に書き込んだ一文を、その通りに生きた人生でした。

パウロがテモテに書き送った手紙のなかで、そのような一生を送ろうとする人に対して、キリストが必ず、ご自分の愛を私たちひとりひとりに注いでくださる。そういう神の祝福があることで、本当の平和というものが、私たちのもとに訪れることを約束しています。最後にこの言葉を読んで、平和をためらうことなく私たちに与えてくださる神に、祈りをおささげしたいと思います。

> 神は、定められた時にキリストを現してくださいます。神は、祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、唯一の不死の存在、近寄り難い光の中に住まわれる方、だれ一人見たことがなく、見ることのできない方です。（6章15～16節前半）

祈り　平和を私たちにもたらしてくださる神、私たちはあなたが与えてくださる愛と平和を守り抜く戦いに負けてしまうことがあります。しかし、あなたが私たちの一生を用いて、その闘いを戦い抜き、平和がこの世界にひろげてくださることを信じます。どうか、私たちの世界を、あなたの平和で満たしてください。
平和の主、イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。　アーメン。